

福岡市埋蔵文化財調査報告書第116集

H I E
比恵遺跡

第8次調査概要



1985

福岡市教育委員会

序

本書に紹介する比恵遺跡は、いまや高層ビル化がすすむ博多駅南の住宅地下に埋没しています。想えば、この地が区画整理されて半世紀、ここ数年ようやく埋蔵文化財保護の立場から調査のメスが加えられるようになりましたが未だ充分とはいえません。

今回の調査では、古墳時代後期の大倉庫群が検出され、日本書紀の記録にある「那津官家」との関連から、多くの方々の关心を呼びました。はたしてこの倉庫群が「那津官家」の一部に該当するか否かは今後の調査、研究に期待されるところです。

本書が学術研究の場で、また市民各位の文化財に対する関心と保護に活用されることを希望します。なお調査にあたって、ご指導、ご助言をいただいた諸先生、関係各位、また心よく調査にご協力いただいた地権者各位に深甚の謝意を表します。

昭和60年3月1日

福岡市教育委員会教育長

西津茂美

目 次

I	はじめに	1
II	比恵遺跡の位置と環境	3
III	第8次調査の概要	7
IV	弥生時代の遺構と遺物	8
V	古墳時代の遺構と遺物	16

例 言

1. 本書は昭和58年～59年度に、福岡市教育委員会が調査を実施した比恵遺跡第8次調査（博多区駅南5丁目12）の概要である。
2. 本書に掲載する遺構実測図は、柳沢一男・杉山富雄（市文化課）のほか、藤尾慎一郎・川村浩司・久保寿一郎・宮井善朗・土井基司・大呑善児・郭鍾詒（九州大学考古学研究室）、南秀雄・鈴木克彦（京都大学）、野村俊之（別府大学）らの作成による。
3. 本書に掲載する遺物実測図は、柳沢・杉山のほか、藤尾・郭・朴美子（奈良県立橿原考古学研究所）が作成した。
4. 本書に掲載する写真は、柳沢・杉山が撮影し、上方高弘が焼付けを行った。
5. 本書の執筆・編集は柳沢が担当した。

I はじめに

いまや高層ビルが立ち並び、宅地と化した比恵遺跡は、福岡市博多区駅南・山王・比恵・那珂地区に亘る広大な遺跡である。昭和13・14年、区画整理事業にともなう地下掘削中に遺跡が発見され、鏡山猛、森貞次郎氏によって最初の調査が行われてから、すでに半世紀をむかえようとしている。両氏の調査の成果は、鏡山猛氏によって「環溝住居址小論（1～4）」（史淵67・68・74・78 1956～59）『北九州の古代遺跡』（1956 至文堂）に発表されて以来、比恵遺跡は弥生時代中期環溝集落として知られてきた。しかし戦後この一帯の宅地化がすすむとともに、鏡山・森氏の調査地点すら不明瞭になっていた。

昭和52年、福岡市中・南部地域の詳細分布調査を実施し、これまでの調査結果、遺物出土地点と旧地形図とのつき合せによって、比恵遺跡が博多湾に突出する洪積台地全面に亘ること、さらに周縁部には水田址の埋没が予想されることなどが明らかになった。

昭和58年8月、当該地権者から住宅建設にともない、埋蔵文化財有無確認の申請がだされた。本地域が比恵遺跡地内にあることからただちに試掘調査を行ったところ、前施設による破壊があるものの遺構の保存が良好であることが判明した。

この結果をうけ市文化課は地権者と協議を重ねたが、現状での保存は困難と判断され専門調査を実施することになった。調査は54年1月17日から4月18日まで、延べ60日間行った。発掘面積は開発対象地4354m²のうち、2240m²である。

調査の組織

調査主体	福岡市教育委員会		
調査総括	文化課長	生田 征生	
	埋蔵文化財第2係長	折尾 学	
調査庶務	埋蔵文化財第1係	岡嶋 洋一	
発掘調査	埋蔵文化財第2係	柳沢 一男	
		杉山 富雄	
調査補助	藤尾慎一郎、川村浩司、久保寿一郎、宮井善朗、土井基司、大呑善児、郭鍾喆（九州大学）、南秀雄、鈴木克彦（京都大学）、野村俊之（別府大学）		
整理補助	藤尾慎一郎、宮井善朗、郭鍾喆、野村俊之、朴美子（奈良県立橿原考古学研究所）		

なお調査にあたって、森貞次郎（九州産業大学）、岡崎敬、横山浩一、西谷正（九州大学）、八木充（山口大学）、沢村仁（九州芸術工科大学）、口野尚志（佐賀大学）の諸先生、福岡県文化課、九州歴史資料館の諸氏から貴重なご指導、ご助言をいただいた。また地権者岩崎純一氏からは調査の実施に絶大なるご協力を賜った。記して謝意を表したい。

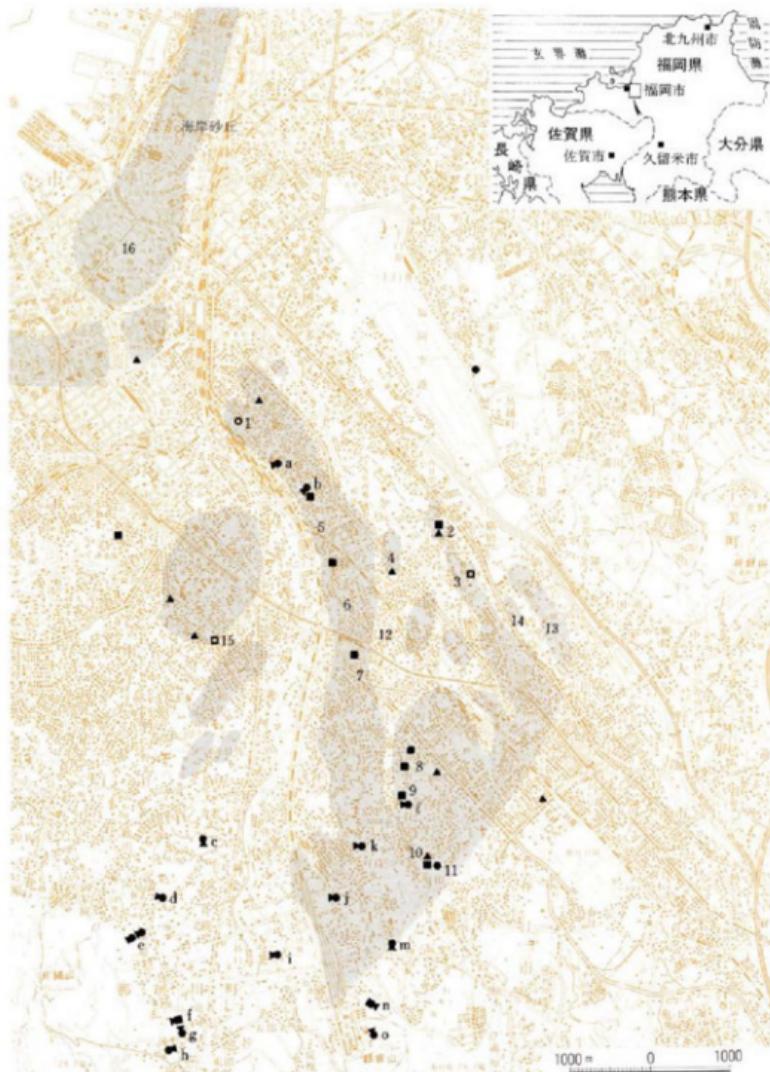


Fig. 1 周辺遺跡分布図

- 銅鐸溶鉄出土地
■ 青銅器溶鉄出土地
▲ 青銅武器・武器形器具出土地
◆ 前方後円墳
- 1 比嘉遺跡群
第B次調査地点
2 板付遺跡
3 高畠遺跡・魔寺
4 諸岡遺跡
5 鮎河遺跡群
6 五十川遺跡群
- 7 井尻遺跡群
8 須久・岡本遺跡
9 赤井手遺跡
10 大南遺跡
11 大谷遺跡
12 三坂遺跡
13 仲島遺跡
- 14 井相田遺跡
15 三宅庭寺
16 博多遺跡群
- a 郡河刺塚古墳
b 郡河八幡古墳
c 老司古墳
d 裏ノ田4号墳
- e 小丸1・2号墳
f 妙法寺2号墳
g 妙法寺1号墳
h 大万寺前古墳
i 良德寺古墳
j 日拝塚古墳
k 白水大塚古墳
- l 竹ヶ本大塚
m 天神山古墳
n ウトロ古墳
o 鶴音山中原I-1号墳

II 比恵遺跡の環境と既往の調査

博多湾に面する福岡平野は、おもに那珂・御笠の2河川の冲積作用によって形成され、東西を80~100m前後の低丘陵によって両されている。平野の形状は、二日市狭隘部を南端とし、北西の博多湾を底辺とする逆三角状にひろがる。もっとも広い東西幅約10km、南北長約10km、面積約40km²あまりの小平野である。

沖積地の周囲は花崗岩と第三紀層からなる低丘陵がせまる。河岸段丘は未発達だが、阿蘇山堆積物によって形成された段丘面（中位段丘正面）が広く分布する。とくに那珂・御笠川にはさまれた地帯と那珂川西岸一帯に著しい。前者のはあい、南端が高位段丘の春日丘陵に接続し、北に向って序々に低くなり、北端部では標高5~6mに高さを減じている。この部分では段丘崖が不明瞭で、縁辺は沖積層下に埋没する。

この那珂・御笠川にはさまれ、南北にのびる中位段丘Ⅱ面をわれわれは那珂台地と呼んでいる。那珂台地は南端の春日丘陵から、那珂川の蛇行に沿って北西にのびる。台地は幅0.5~0.9km、延長約6kmあまりである。

本書に報告する比恵遺跡は、この那珂台地の先端（北端）部の全面にひろがり、東西0.8km、南北1kmの範囲と予想される。

ところで弥生時代遺跡にかぎると、那珂台地上では既往の調査例が少ないため内容は不明瞭だが、比恵遺跡の南に那珂、五十川、井尻、弥永原遺跡などがほとんど間断なく接続し、いわば那珂台地遺跡群と総称すべき分布状況である。さらに南端部から春日丘陵にかけては、須久、岡本、大南、大谷、赤井手遺跡などの弥生時代遺跡が集中する。また那珂台地と御笠川とのあいだには、残丘状の段丘面が点在し、板付、諸岡、高畠、麦野、三筑遺跡などの分布が知られている。近年にいたって、沖積地下に埋没した低位あるいは沖積段丘上に仲島遺跡の存在も明らかになりつつある。同様に、現在高層ビルの樹立する博多でも、埋没砂丘上に中期以降の遺構が検出されている。こうしてみると、福岡平野部では、ほとんどの台地、沖積高地に上に弥生時代遺跡が分布しているとみてよい。わけても那珂台地のはあい、遺構分布の密度、継続期間、規模などから九州はおろか列島を代表する弥生時代遺跡といえるであろう。

つぎに古墳の分布をみると、主要な前方後円（方）墳は、平野西半の那珂川中・下流域に集中する。18基の前方後円（方）墳のうち16基が中流域周辺に、残る2基（那珂八幡、那珂剣塚）が下流域那珂台地上に分布する。50mを超える墳丘規模の占墳を抽出すれば、安徳塚、老司、那珂八幡、貝徳寺、下白水大塚、日拝塚、剣塚古墳という年代序列が推測され（那珂八幡と貝徳寺のあいだは年代的幅が大きく、いま1基存在した可能性がある）、4世紀後半から6世紀後半にいたる首長塚の系譜と解することができる。このように中・下流域の大形前方後円墳を同一系譜とするならば、福岡平野西半に中流域と下流域を本貫とする二つの有力な集団が存在し、那珂八幡、那珂剣塚の段階で首長権が移動したという推測も可能になるかもしれない。

奈良時代の福岡平野は、筑前国でも那珂・御笠・席田の3郡に分割されるが、大半は那珂郡に属する。7世紀末には、かつて那珂川中流域を本貫とし前方後円墳群を造営しつづけた氏族の氏寺（三宅庵寺）が創建される。一方那珂郡衙は、所在地をいま一步限定しえないが、下流域那珂台地上、現在の博多区那珂周辺に設けられた可能性がつよい。そこから1.5kmほど南東の高畠庵寺は8世紀中葉の創建とみられるが、「郡」「板加」「中」「寺」などの墨書き土器があり、那珂郡衙推定地に近い那珂深オサ遺跡からは「中寺」銘の墨書き土器が出土している。高畠庵寺が「中寺」=那珂寺と呼称され、郡寺的色彩のつよい寺院であったことが予想されよう。

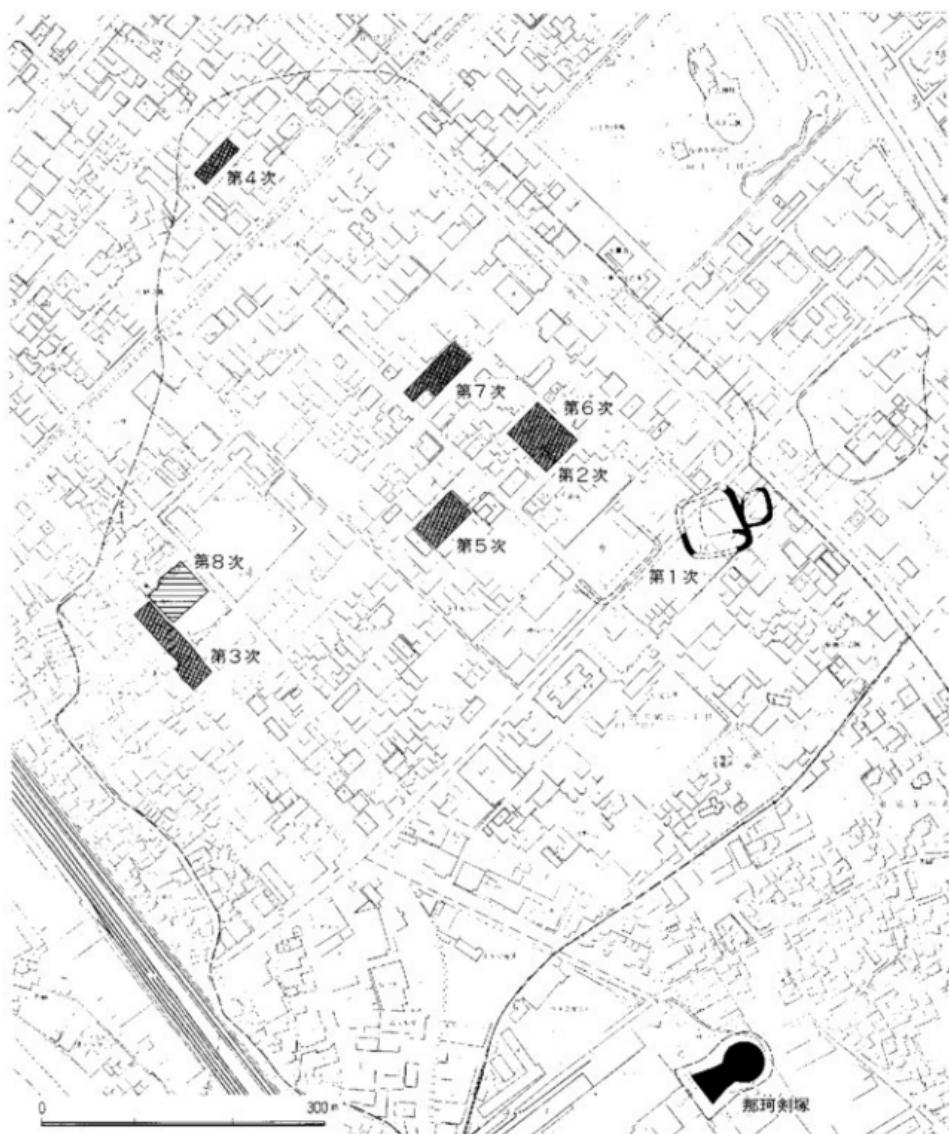


Fig. 2 比忠遺跡群全体図 (1:6000)



既往の調査
Fig. 3 調査区位置図 (1:10000)

比恵遺跡にたいする考古学的調査は、昭和13・14年の鏡山・森先生による第1次調査を鏑矢とし、これまで8次¹⁾にわたって実施され、豊かな内容の一部が明らかになりつつある。これまでの成果を弥生・古墳時代に限って概述しておきたい。

まず弥生時代開始期に、二叉にわかれた比恵・春住地区的台地端にそれぞれ集落が形成された。両地区とも遺構面の削平が著しいため竪穴住居址は消滅したとみられ、貯蔵穴のみが検出されている。比恵地区では台地西端の段落ち部が調査され、水田址と想定される湿地が検出されたが、水田と断定するにいたららない。この段階に、台地周辺にひろがる河川後背地を開発した水田が営まれたことは充分予測される。

中一後期には、台地の各所に集落が分布し、また5個所に墳塚墓地がみとめられる。しかし限られた面積の調査のため、規模、継続期間など集落構造理解の要件を満たす例がない。宏大的な台地上の分布が、いくつかの集団に分離されるのか、それとも数少ない集団の移動によって生じた結果なのか、今後の課題である。なお、第1次調査で検出された環溝集落址については、年代比定を含めて検討すべき余地が多い。

古墳時代では、前～中期段階に比恵地区に突出した集団の存在が予想される。5次調査で4世紀代の柵列をめぐらせる掘立柱建物群が、7次調査では5世紀前半代の7×2間という大形掘立柱建物が検出された。一方春住地区では4～6世紀にわたって継続する集落がみとめられる。また6世紀中葉～後葉には柵状遺構をともなう倉庫群が出現するのである。

- 1) 2次調査 1952 概要是『比恵遺跡—第6次調査・遺構編』(福岡市報94集 1983) 参照
- 3次調査 1966・67・69 「見捨てられた春住遺跡」 1972 筑紫野史学研究会
- 4次調査 1979・80 「瑞穂—福岡市比恵台地遺跡」 1981 日本住宅公团
- 5次調査 1981 今年度報告予定
- 6次調査 1982 上掲文献
- 7次調査 1983 今年度報告予定

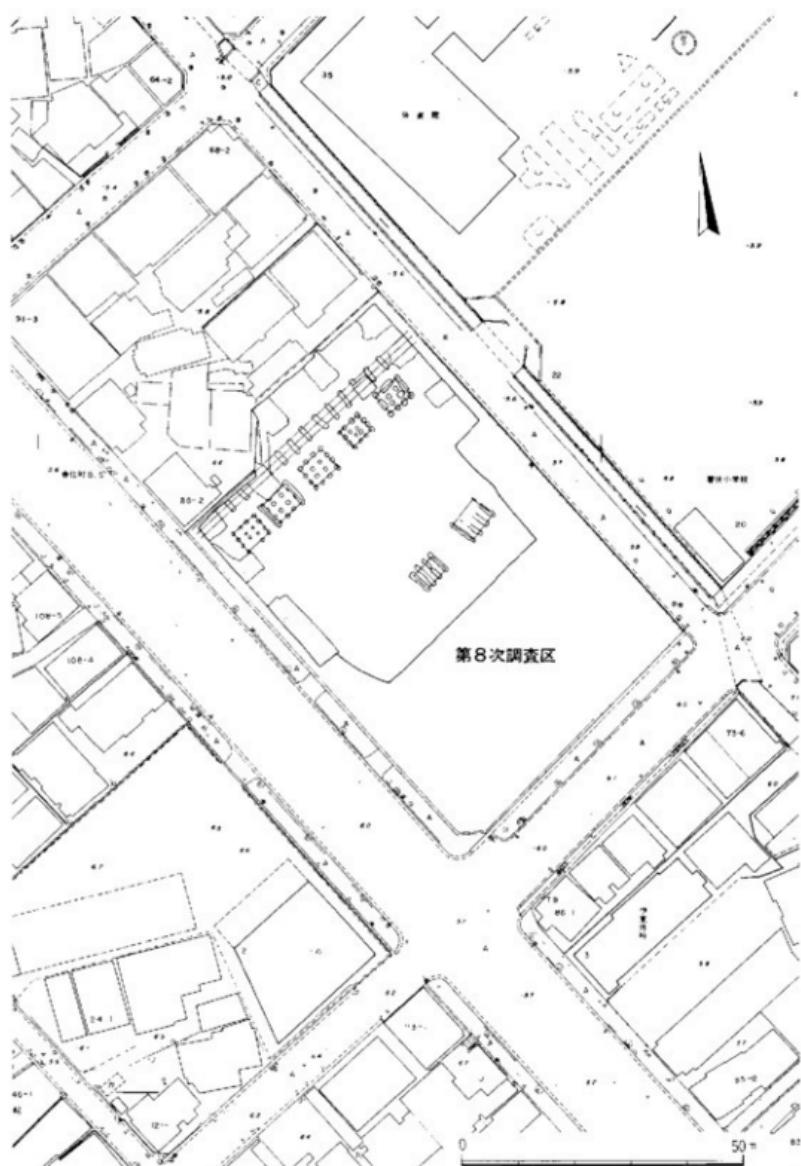


Fig. 4 調査区位置図 (1:1000)

調査区内這樣は様状道構と金庫群
了:部は捜乱

III 第8次調査の概要

第8次調査を実施した地点は、比恵遺跡でも北西辺にあたり、昭和42・44年に県道博多駅・竹下線建設に伴い民間研究団体によって観察調査された第3次調査区の東に接する。現在、周辺は住宅地となって旧地形のわきかげをとどめていない。区画整理実施前の地形図とつき合せてみると(Fig.3)、那珂台地北辺は中央に大きな谷地形がありこみ、いわば二又に台地端が延びるが、その西側台地の東北隅に近い部分が今回の調査箇所である。

第8次調査は、当初開発地全域(4354m²)を対象としていたが、種々の事情によって発掘調査を実施した範囲はつぎのようにきわめて要則的なものとなった。まづ完掘した範囲は対象地北辺の1410m²である。その南に接する830m²については、遺構検出を行ったのち、地表に露出していた墓棺5基と布堀り掘り方の掘立柱建物2棟の調査を行ったにすぎない。開発計画が変更されたため執られた措置であるが、未調査の遺構は地中に保存されており、今後の再調査がのぞまれる。

層序

昭和8年以降の区画整理による地下げのため、現表上下はただちにローム層があらわれ遺構検出面となる。しかし調査区の北端付近では台地が下降し、遺物を包含する黒色～黒褐色粘質土の堆積がみられる。また全体が東にわずかながら傾斜しており、調査区が台地北東隅に近いことをしめしている。区画整理時の地下げは、墓棺出土状況から判断して0.6～0.8mあまりではなかったと想定される。表土除去後の遺構確認面はほぼ標高6m前後をはかる。区画整理の後、何度か大形建物が建替えられているため、基礎工事による擾乱・破壊が著しいものの、掘り込みの深い遺構の保存は良好である。

遺構の概要

叙上のように遺構面がかなりの削平をうけているため、掘り込みの浅い遺構はすでに消滅している可能性がつよい。とくに堅穴住居址のばあい、削平の少ない縁辺部でかろうじて壁をとどめる状況から、相当数にのぼると思われる。

検出された遺構は、弥生・古墳・奈良・鎌倉・室町の各時代にわたる。

弥生時代では、前期の貯蔵穴群、中期初頭～後葉の墓棺墓群、中期末～後期後葉の住居址・井戸などがある。利用のされ方は異なるといえ、弥生時代全期間を通して利用された空間といえる。

古墳時代では、前一後期(6世紀中葉頃まで)集落として利用されていたらしい。検出された堅穴住居址・柱穴をまとめた掘立柱建物は少ないが、該明の遺物が多量に出土している。

本調査でもっとも注目されるのは、集落廃絶後に造営された自庫群と棚状遺構である。棚状遺構SA091は調査区の北辺を北東～南西方向に貫ぬく。その南側には3×3間の倉庫と思われる総柱建物が5棟東西に並列する。またその南側には方向を逆えて2棟の総柱建物がある。これらの施設は遙くとも7世紀後葉には廃絶している。

以下、時期を追って概要を記すことにしたい。なお、今回は整理の進んでいない奈良時代以降について扱わない。

IV 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は調査区全面にわたって検出された。前期の貯蔵穴11、中期初頭～後葉の甕棺墓13、中期末～後期後葉の竪穴住居址7などがある。遺構検出面は旧地表からかなりの削平をうけているため、竪穴住居址、小児甕棺、土壌など掘り込みの浅い遺構はすでに消滅したものも少なくないであろう。多数検出された柱穴のなかには、そうした竪穴住居址に伴うもののか柱立柱建物の存在も予想されるが、柱穴出土遺物の検討を行っていないため本概要で取りあげることができない。

貯蔵穴

11基検出された。調査区中央の東縁部におもに集中し、西半部は3基が点在するにすぎない。

貯蔵穴の形態はつきの三種に大別される。

I 長方形プランで壁面が垂直もしくはやや外傾ぎみに立ちあがるもの。SK008、009、064、069、097、118、123の7基がある。

II 底面プランは不整な方形もしくは隅丸方形で、壁面が著しく内傾し、断面形が袋状をなすもの。SK102、124がある。

III 底面プランは円形、壁面が内傾して袋状の断面形をなすもの。SK114、126。

出土遺物からみると、I類はもっとも先行し夜臼系土器を含む板付I式期に限定される。II類も板付I式期に属するが、総じて後出的な土器相である。III類の円形袋状貯蔵穴のばあい板付II式期を過らない。こうした貯蔵穴のI→II→III類という形態変化は、福岡平野部での一般的傾向といえる。

いずれの貯蔵穴からも床面出土遺物は少ない。SK118では床面に多量の炭化米を含む黒色土の堆積がみとめられた。

貯蔵穴一覧

(単位:m)

No.	平面形	壁	短辺	長辺	深さ
SK 008	長 方	垂直	1.4	2.15	0.57
009	+	+	1.3	2.0	0.65
064	+	+	1.0	2.4	0.8
069	+	+	2.15	2.7	0.15
097	+	+	1.5	1.85	0.5
102	隅丸方	袋状	1.9	2.2	1.27
114	円	+	+	1.85	0.45
118	方	+	1.5	1.6	0.4
123	長 方	垂直	1.7	2.5+α	0.4
124	隅丸方	袋状	1.9	—	1.0
126	円	+	+	1.6	0.57



Fig. 5 SK008 (東から)

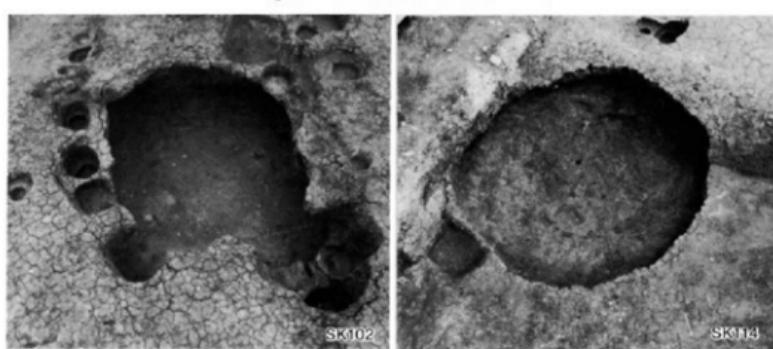
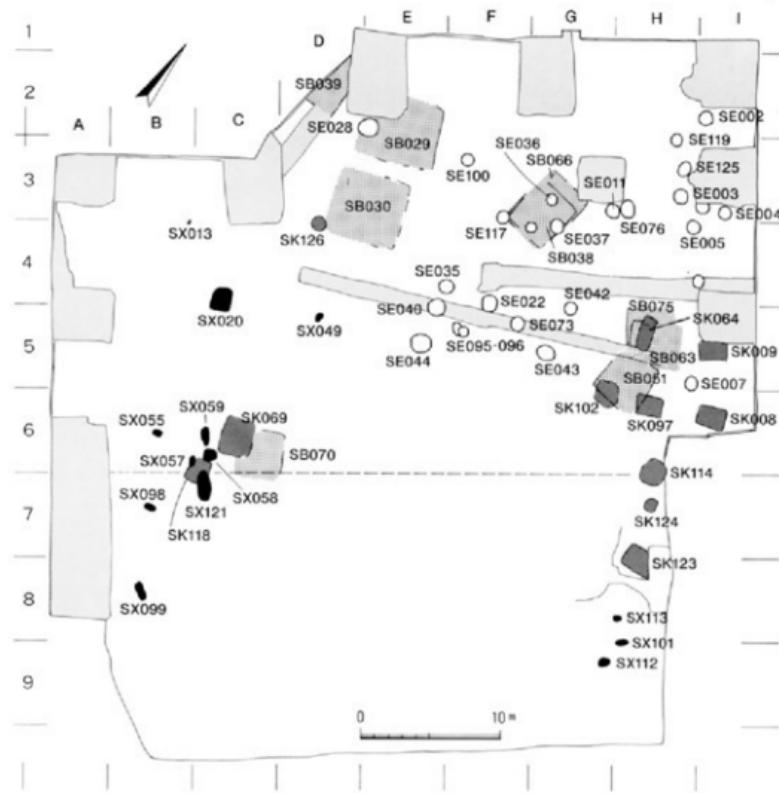


Fig. 7 開窓穴

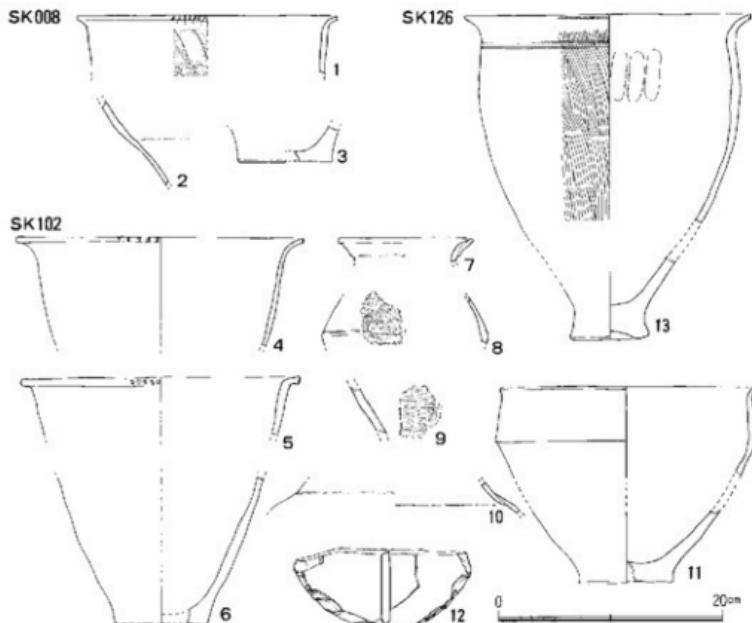


Fig. 8 貯蔵穴出土遺物実測図 (1:5)

貯蔵穴の出土遺物

SK008 壺1・3は口縁部が短かく外反し、端面幅いっぱいに刻目を付す。2は大形壺の体部上位から頸部にかけての破片。頸・体部の境に段がある。埋土出土。

SK104 壺は大・中・小がある。小形壺7のII線部は粘土貼付による段をもつ。8は体部中位が屈折するタイプ。1条の沈線をめぐらし、その上位に複線山形文を沈線で描く。中形壺10は体部上半の破片。頸・体部の境に段を付す。9は頸部と体部の境に3条の沈線がめぐる。大形壺であろう。壺5・6は同一個体だが、接合しない。4の口縁部は如意形に外反し、端面いっぱいに間隔の粗い刻目を付す。5の口縁部は肥厚しながら外方につよく屈曲するもの。壺面に先端が丸みをおびた施文具による刻目を付す。鉢11は口頸部と体部との境が屈折し、底部に向かってつよくそばむるもの。II線部がわずかに外方に引きだされている。石包丁未製品12は、粘板岩を節理に沿って薄く割りとったものを折り、刃部相当部に加鑿による調整を加えている。いずれも埋土から出土。

SK126 壺13は、ゆるく外反する口縁部の端面下部に細かな刻目を付す。体部上位に2条の沈線がめぐる。底部はあげ底状。埋土出土。

甕棺墓

調査区の西半に10基、東南部に3基の計13基を検出した。さほどの集中性がなく散漫な分布状況である。しかし、かろうじて墓壙底面に遺存する小児甕棺の出土状況や、後出する井戸、土壤、柱穴掘り方などの埋土から多量の甕棺片が出土することから推して、小児棺のみならず成人棺も相当数が破壊・消滅しているとみられる。

甕棺の規模から成人棺とみとめられるものはSX020、121の2基にすぎず、他はすべて小児棺と思われる。

遺存状況のよくないこともあって、埋葬人骨の残りは悪い。SX058、121にわずかに残存していたが、未分析のため性別、年令など不明。

検出した13基の甕棺のうち時期的にもっとも遅いものは、SX013・020・049・099などで中期初頭である。前葉、中葉とわずかながらも継続し、中期後葉の比較的古い段階（SX101・112など）で終る。

甕棺内から副葬遺物は出土していない。

西に接する第3次調査区でも数基の甕棺が検出されており、この一帯が中期の段階で墓地として利用されていることが明らかになったが、第6次調査区にみられるような集中的な分布をしめさないことが特徴的である。この地区を含めて、比恵遺跡には5ヶ所の甕棺を中心とする墓地が検出されたことになる。



Fig. 9 C 6 区甕棺群（東から）

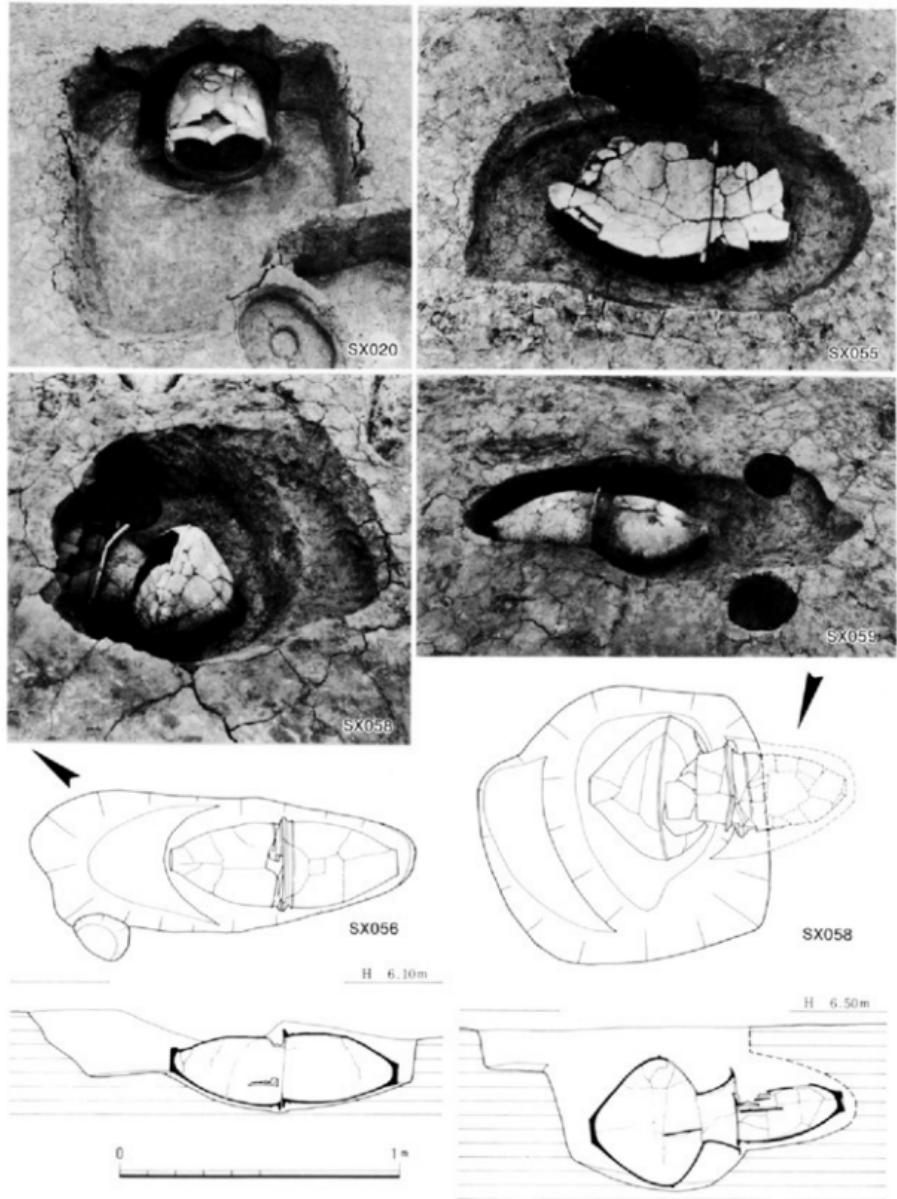


Fig. 10 贻棺

住居址

豎穴住居、掘立柱建物がある。後者はいくつかの復原案があるが、柱穴出土土器の検討を経ていないので確定しがたい。弥生時代に限定しうる豎穴住居は7棟にすぎないが、すでに削平され消滅したものを想定すると、調査区全面に拡がっていたと思われる。

時期の確定しうる7棟の豎穴住居址のうち、前期末葉のSB070を除くとすべて後期に属する。前期はSB070一棟にすぎないが、末葉の土器は調査区全体の後出遺構埋土からまんべんなく出土しており、該期の集落の存在を推測することができる。

その後この一帯が豪棺墓地に変貌したことは前述のとおりである。

再び集落が形成されたのは墓地廃絶後の中期後葉である。該期の住居址は検出されていないが、その段階の遺物は井戸埋土などから相当量出土している。

後期の豎穴住居址には、SB029、038、039、051、063、066、075がある。プランはすべて長方形か方形、ベット状遺構を伴う例はみあたらない。そのなかの時期細分は出土土器が少ないこともあって難かしいが、後述する井戸出土遺物とつき合せてみると、終末期まで断続することなく継続したとみられる。もっとも時期の下る豎穴住居址は後期終末のSB038である。



Fig.11 SB038.066（南から）

井戸

調査区内に検出された井戸31のうち、末掘の2基を除いて26基が弥生時代後期に属する。井戸の分布は調査区東辺にかたより、旧地形の復原からすれば台地縁に集中することが知られる。

該期の堅穴住居址との重複は稀れでないが、井戸と井戸の重複は一例のみである。

井戸のプランは円形、上端径0.8~1.6mすべて素掘りである。深さは0.9~2.4mと一樣でない。底面を八女粘土層まで掘り抜いた例はない。ちなみに底面レヴェルを標高でしめすと、もっとも低いSE035で3.5m、高いSE096が5.1mである。多くは4~4.5mのあいだに分布する。

壁面はほぼ垂直なものと外傾するものがある。底面は平坦なものが多いが、丸みをもつ例もある。壁・底面とも平滑で、まれに凹凸のものがある。

井戸の廃棄後はほぼ自然堆積にまかせるものと人為的に埋め戻す例がある。SE003のはあい、ほとんど地山で埋めつくされている。またある定度自然埋没した後、土器を一括廃棄した例もある(SE002・007)。

井戸内からは多量の土器のほか木製品も出土した。しかし板材などが多く、木器といえるものはみとめられなかった。井戸底面、もしくは若干ういた位置に壺・甕などの完形品に近いものが数点出土する例があるが、こうした祭祀的な事例は後期でも古い段階に多い。

調査区北東隅近くに検出されたSE002では、埋没途中に一括廃棄された土器が検出された。後期末葉の土器組成として良好な資料と思われる所以示しておくことにしたい。

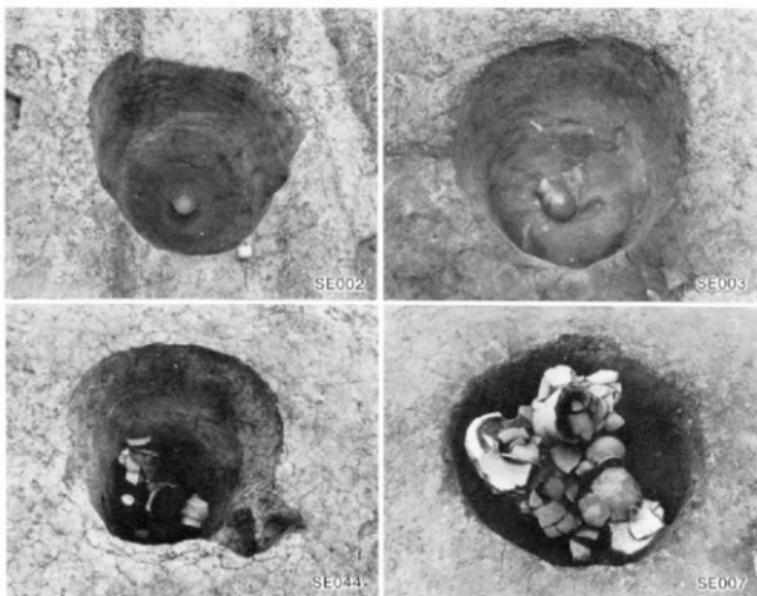


Fig.12 井戸

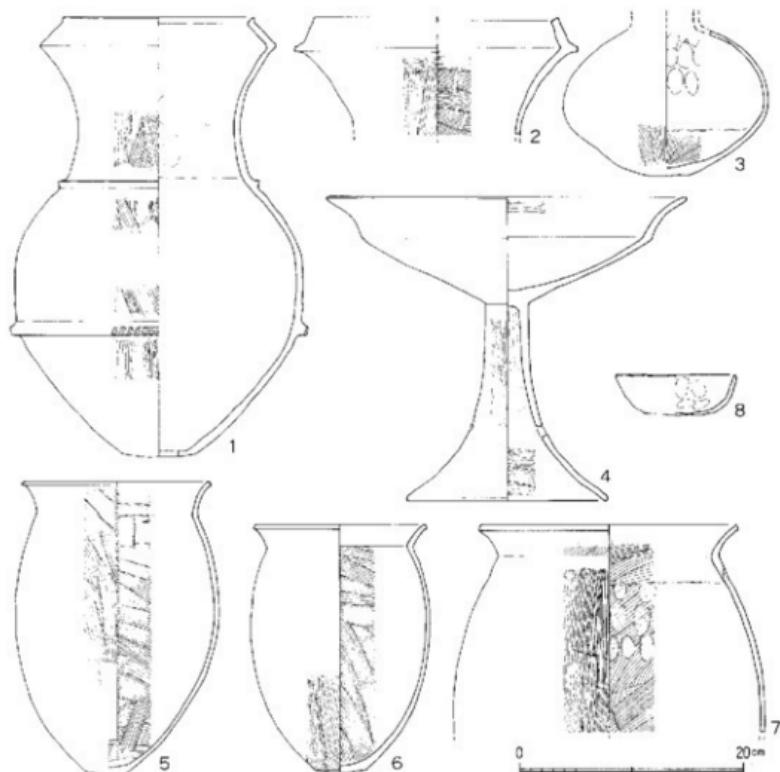


Fig. 13 SE002 出土土器実測図 (1:5)

SE002出土土器

広口短頸壺、器台、大形壺を欠くが、他のセットは揃っている。

壺（1・2）「く」字形につよく内傾する二重口縁で端部が短かく立ちあがる。体部上・中位の二ヶ所に凸帶をめぐらす。底部は尖りぎみの小さな平底。

長颈壺（3）口頸部を欠く。体部は中位が張り、小さな平底に向ってつよくしまる。体部外面は細かいヘラミガキ。

壺（5～7）大・中・小がある。口縁部は短かく外反し、端部がわずかに肥厚する。口縁・体部境の内面は明瞭な稜をとどめる。尖りぎみの小さな平底である。5の体部下位外面は、板ナナフ状の削り調整がみられる。

高杯（4）杯の口縁部はのびておらず短かく外反する。脚部は長く、ゆるく外開する。

椀（8）手捏ね様の粗いつくりである。指頭圧痕が顯著。

V 古墳時代の遺構と遺物

概要

古墳時代の遺構・遺物は、前期前半から後期のはば全期間にわたり、調査区全域から検出された。しかし先述したように、遺構面の著るしい削平により遺構の遺存状況はよくなく、検出された遺構は掘り込みの深い井戸、土壙、堅穴住居址などに限られたのではないかと思われる。なかでも堅穴住居址のばあい、かろうじて遺存した壁面の存在によって確認した程度であって、堅穴住居址の有無をもって集落の存在を判断することはできない。

前期段階では、包含層と後出の遺構埋土から該期の土器が出土するが、明確な遺構はみとめられない。調査区北東隅に検出された掘立柱建物SB001のばあい、時期を確定するにいたらないうが柱穴出土の最新土器が弥生終末を下らないことを考慮すれば、この期に属する可能性がある。掘立柱建物については、いくつかの復原案があるものの、充分な検討を行っておらず、ここでは略せざるを得ない。しかし該期の堅穴住居址がすべて削平されてしまったとは思えない。壁溝のみの遺存で時期を限定しえない堅穴住居址のなかに、この期に属するものがある可能性を否定しない。

5世紀代の遺構として、調査区の中央部に検出された4棟の堅穴住居址がある。5世紀前半から後半にかけてのもので、住居址相互の重複状況（3回）からすれば集落として一定の継続期間が予測される。この期の土器とこの期に属するであろう扁平な滑石製白玉が調査区全域から出土しており、広い範囲に集落が営まれていたと思われる。

堅穴住居址が姿を消した5世紀後半以降、掘立柱建物からなる集落が6世紀中葉頃まで継続したとみられる。この期の遺物が数多く出土すること、土壤がみとめられること、何にもまして多数の柱穴があることによる。平面プランを復原したのもいくつかあるが、いかんせん全体像を浮びあがらせるまでにいたらず、時期確定もおぼつかない。本報告で責を果したい。なお6世紀前半～中葉に属する2基の井戸（SE010・026）が検出された。

6世紀中葉頃まで継続した集落は忽然と姿を消し、柵状遺構に囲まれたと思われる掘立柱建物群が出現する（この建物群は脛り方が大きく総柱建物であったため、平面復原が比較的容易であった）。詳細は後述するが、相当な面積を占有した施設であったことは建物の配置状況からうかがうことができる。

なおこの施設の造営にあたって若干の整地が行われたかもしれないという痕跡がある。前段階の集落に関連する井戸SE026の埋土から出土した土器は6世紀中葉～後半の早い段階を最新とするが、夜臼式期以降の各期にわたる土器組片が大量に廃棄されている。こうした埋没状況は、各種の事情が予想されるなかで、整地にともなう人為的な埋め戻しという場面の想定をさまたげないであろう。

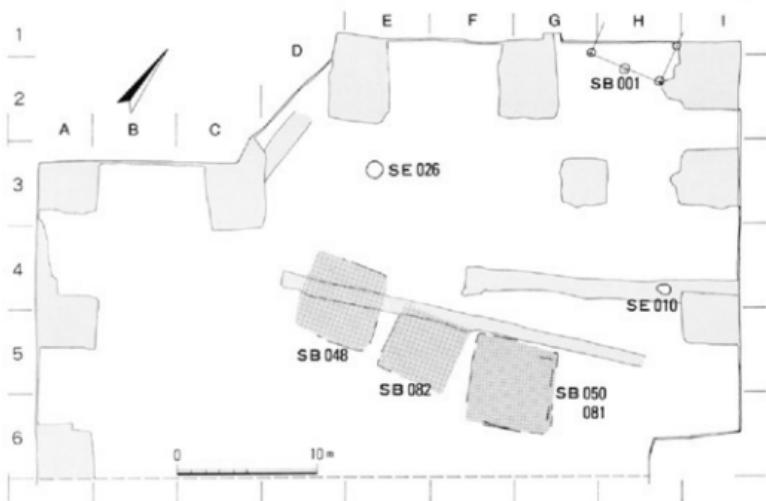


Fig. 14 古墳時代遺構配置図 (1:400)



Fig. 15 SB 050, 081 (東から)

柵状遺構と倉庫群

調査区の北辺に南北方向に並う 3 本の柱を一組として北東～南西にのびる柵状遺構と、その南辺に沿って東西に並列する 3 × 3 間の総柱建物 5 棟、さらにその 20m 南方には叙上の建物とは若干方位を異にする 3 × 3 間の総柱建物 2 棟が検出された。

柵状遺構とした SA091 は磁北から約 36°30' 東に振れる。延長 37.2m の 12 間分を確認した。その両端は既存建築物の基礎工事等による地下げ、攪乱などによってすでに消滅し検出できなかつたが、さらに東西方向に延長するとみられる。

総柱建物はいづれも高床の倉とみられる。3 × 3 間といつても方形でなく、東西方向が長い長方形プランをとる。SA091 の南辺に並列する SB086～090 の 5 棟は、1 棟ごとにわずかづつ規模が異なる。また建物相互の間隔も広狭ささまざまあって、もっとも狭い SB086・087 のあいだは 2 m 前後にまで接している。

アトランダムに見える配列だが、SA091 と建物、建物相互にいくつかの企画性をうかがうことができる。一つは、5 棟の建物はいづれも南北柱筋の一つが、SA091 柱筋の延長上にのる。いま一つは、5 棟全体を貫く柱通りはみとめられないが、隣接する建物間で南辺あるいは北辺の柱筋を揃えるというものである。

調査区南部半の 2 棟 SB115・116 は、南北柱筋の掘り方を布掘りとする。両者の方位に多少の差異があるものの、ほぼ並列する配置は一定の企画のもとに造営された可能性がつよい。

叙上のように、SA091 と南辺 5 棟のあいだには同時企画とまでいえないにせよ、相互のつよい関連がみとめられ、近接した時期の造営が想定される。これらと方位を違える南半の 2 棟は、異なる企画の配置と思われるが、はたしてある種の事情にもとづく増築的なものなのか、あ



Fig.16 調査区全景（南から）

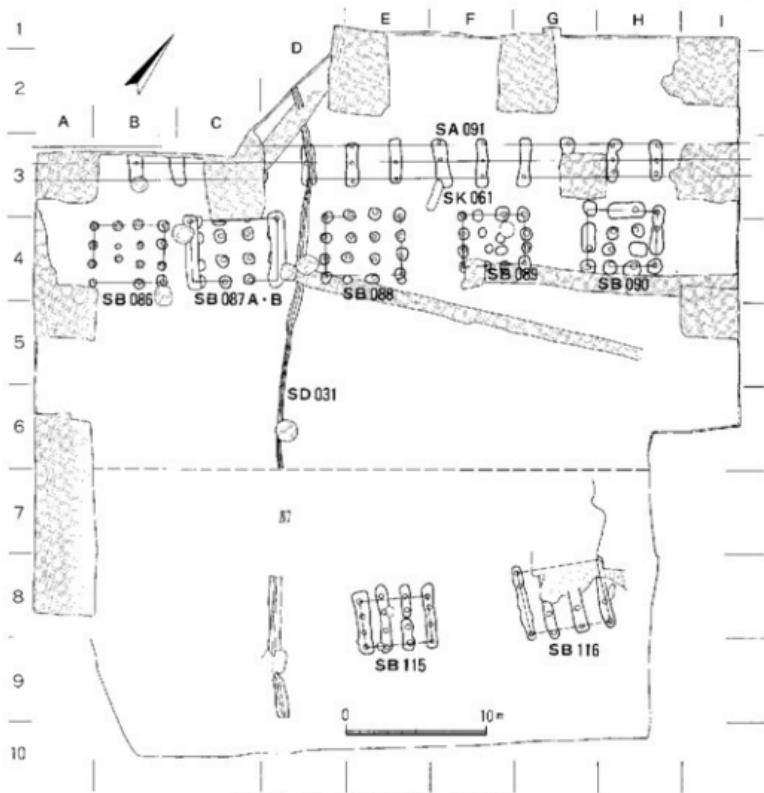


Fig. 17 橋・倉庫群配溝図 (1:400)

るいは全体的な建替なのか、限られた範囲の調査では判断しえないところである。

この施設の造営年代は、先述したように既存集落の廃絶とほぼ等しい時期を想定しうるならば、6世紀後半の早い段階ということができる。その終焉期に関しては直接的な情報がみとめられないが、SA 091の柱穴が奈良前半期埋没の溝 SD 031、7世紀後半の土壤 SK 061に破壊されている。遙くとも7世紀後半に、この施設が廃絶していたといえるにすぎない。

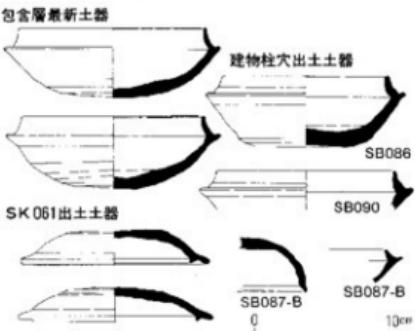


Fig. 18 出土土器実測図 (1:4)



Fig. 19 SA091と倉庫群（東から）

SA091 3本の柱が一組となり、あたかも複廊状の柱配列のような構成をとる。12間分、延長37.2mにわたって検出されたが、さらに東西にのびる点については先述したとおりである。

南北方向3本の柱筋は布掘りの掘り方となる。掘り方はほぼ方位を掘え、上端で南北長3~3.5m、東西幅0.7~1mの隅丸長方形プラン、0.3m前後の深さをはかる。布掘りといつても底面は平坦でなく、柱を据えるにあたって底面を不整円形に一段深く掘り下げるばいが多い。埋土はつよくしまった黒褐色粘質土、先行遺構と重複するものが多く、多量の土器を含む。柱径は柱痕跡の確認した範囲で20~30cmとあまり大きくなり。

南北3本の柱間規模は、東端の2列が2m前後と狭いが、他は2.4~2.5mをはかり、中央の柱から南・北の柱間は1.2~1.25mとなる。柱の太さと勘案すると、実際の柱と柱のあいだは0.6~1m前後にすぎなくなる。3本の柱のうち、中央のものがとくに大きいとか深く掘えられているという状況はみとめられなかった。また南・北の柱が垂直でなく内傾するような配置も観察した範囲内には存在しなかった（当初、布掘り掘り方と気付かず、また柱痕跡も不明確であったため底面まで掘り下げるというミスを犯した部分があり、そうしたものについては確認してない）。

東西方向の柱通りは、北・中央・南とも比較的よく掘う。中央の柱通りはとくによく、柱痕跡が大きくなれるものはない。柱間は土10cm未満で、ほぼ3.1m等間といつてよい。

こうしたSA091から、はたしてどのような構造物が推測されるのであろうか。たしかに3本の柱が一組となって、その組み合せによって何らかの上屋、あるいは横方向の構造を支えることが想定される。0.6~1mという柱間隔から、廊状の構造を考えるにはいさか無理がある。中央柱を心柱にした築地様のもの、あるいは伊勢神宮内宮をめぐる板垣様なものなど種々予想されるが、いまのところ類例に乏しく成案を得ない。今後の課題としたい。

SB086 建物の平面規模は各隅角の柱痕跡の中心間を計測すると（以下同）、南北4.04~4.08m、東西5.08~5.10mをはかる。柱穴8は攪乱のため消滅している。南北方向にくらべて東西方向の柱並びがよくなく、柱穴7は大きく北にずれる。掘り方は0.6~0.8mの不整円形、柱径（痕跡径—以下同）は6を除いては28~38cmである。深さ0.3~0.5m。

SB087 南北柱筋の東西両端を改築し、東西長を拡大している。柱穴5・9は攪乱のため消滅。改築前をA、後をBとすれば、Aは南北4.40~4.48m、東西6.20m、Bは南北幅をそのままにして東西長を約6.1mに拡げている。改築時の掘り方は布掘りで、その底面下にAの掘り方、柱痕跡が一部遺存する。

SB088 南北4.12~4.16m、東西5.35~5.38mをはかる。南東の隅柱はつけ替えた可能性がある。各方向の柱通りはよいが、東西柱筋の南北端中央2本が外方に突出している。掘り方は0.6~0.8mの不整な隅丸方形、柱径は20~35cmと他の建物とくらべてやや小さめである。深さ30~40cm。

SB089 南北3.50~3.74m、東西4.43~4.45mと7棟のなかでは最小の建物。南辺の東西柱筋が歪んでいる。西から2列目の南北柱筋は通る線がないほど歪んだ柱配置である。掘り方は0.6~0.9mの不整な円・方形というべきもの、柱径は25~46cm、深さ35~40cmあまりをはかる。

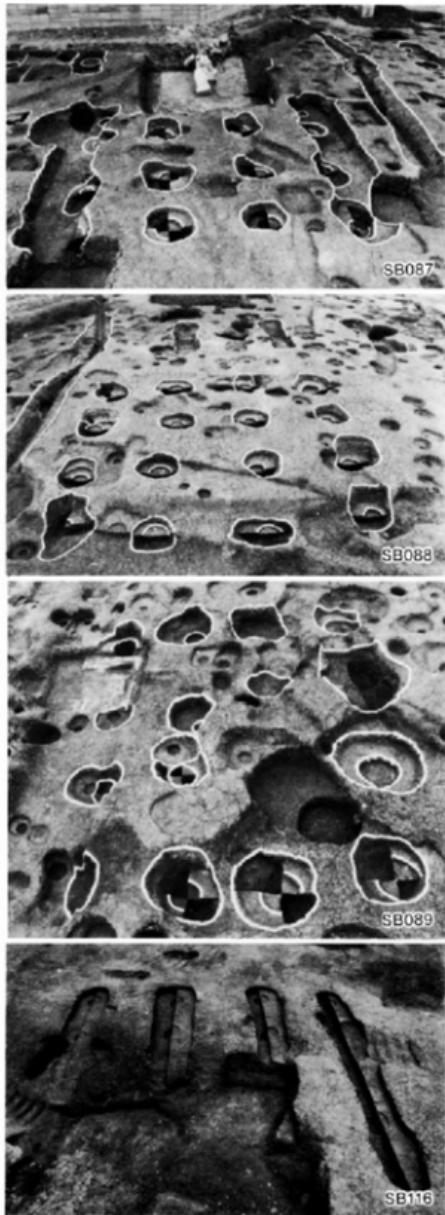
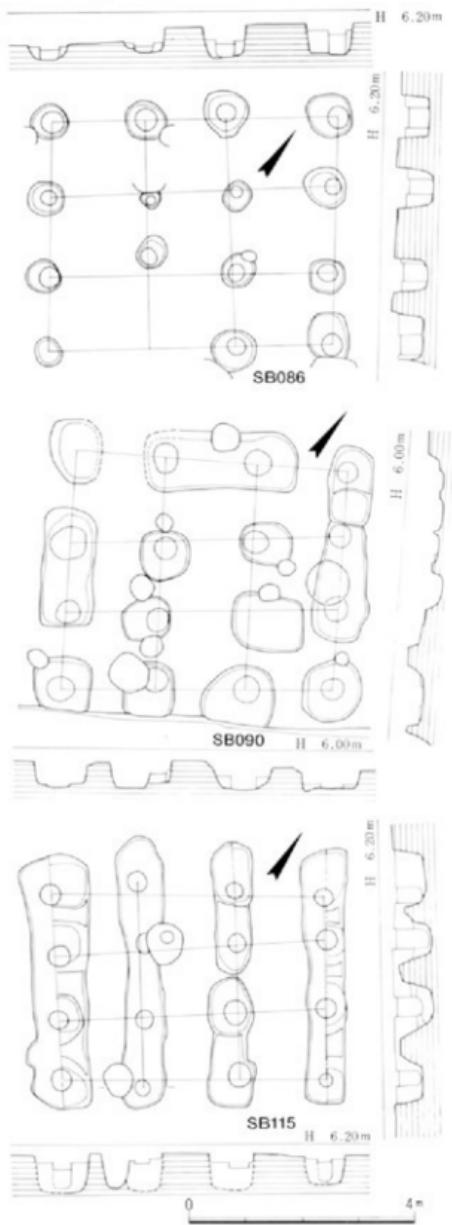


Fig. 20 插立柱建物

SB090 南北3.89~4.25m、東西4.85m、東辺の狭まる台形状の平面形をなす。南辺を除く各辺の間柱のあいだは布掘りの掘り方である。他の掘り方は0.8~1.3mの不整円・方形で、柱径も建物群のなかでもっとも大きく40~50cmをはかる。深さ30~40cm。

SB165 南北3.27~3.32m、東西4.72~4.85mと各辺の長さは整っているが、平面形は平行四辺形に歪む。柱穴掘り方は南北柱筋の布掘り、下部は柱1本づつ分掘り下げている。掘り方は南北長4.5~5m、幅0.7~0.9m。柱径24~40cm、深さ40~55cm。

SB116 北東辺は攢乱によって消滅している。南北4.52m、東西5.75m、SB115同様に平行四辺形状プランである。柱3は抜かれている。柱径は27~36cm。掘り方の形状もSB115に等しい。

以上のように、各建物の柱配列とくに東柱の配置は一定性に欠けるばかりもある。こうした杜撰にみえる柱配置は、逆にいえばこれでもなお建築可能な上屋構造の倉であったことを示唆する。すなわち根入れの側柱が直接屋根を支える構造ではなく、床板上に校木を組みあげたことも予想されるし、あるいは板張りであったとしても、厚い床板上に枘穴を穿って柱を立てるこ^トとも可能であるという。

建物に関していま一つ注意されるのは、近接して建てられた倉が単体で使用されたのではなく複数が接続したかたちの並倉として機能したのではないかということである。南辺の柱筋がほぼ通るSB089と090のばあい、建物間が4.5mとやや離れているが屋根のみの架構であれば想定可能という。より建物間のせまいSB086~088の3棟にあっては、屋根のみならず床板をかけわたすこともできるかもしれない。また別の組み合せも予想されるところであろう。今後の検討に俟ちたい。

柵・倉庫群の範囲と規模

検出された柵状遺構・倉庫群は、その配置状況からみて、今回の限られた調査区をはるかに超える大規模な施設であることが容易に推察される。さらに想いめぐらせれば、かかる大形倉庫群が、単独に營まれたとは考えにくい。とりあえず旧地形形の復原を通して、この一帯に大形施設の配置が可能か否か、また、どの程度の範囲が予想されるか検討してみることにしたい(Fig. 1-3参照)。

比恵遺跡は那珂台地が沖積地に突出する台地先端部に拡がること、その先端中央に谷地形が入り込んで二叉状をなすのが、本調査区はその西方台地の北東隅にあたることは先述したとおりである。本地点から那珂川まで約400m、6世紀代の那珂川河口(現住古神社の北辺部と推測する)まで約1.7kmである。

さて比恵遺跡春住地区(本調査区を含む西方台地を仮称して)は、旧地形図をみても周辺は水田化されているが、北・東辺部を除くと本来沖積地でなく、台地を地下げした新田開発のものと思われる。これと似た状況は東台地に著しい。旧台地端をトレースすると、春住地区は東西250~300mの台地幅が想定される。台地の北西端は調査地点から100~150mあまりと思われ南側に拡がる。

柵状遺構 SA091が倉庫群と外部を区画するものとすれば、検出された遺構の位置は旧地形からみて、倉庫施設の北東隅近くにあたると想定される。SA091は調査区から10~20mほど東にのびて終るか、あるいは南東方向に折れまがる可能性がつよい。またこの倉庫群がある種の施設に併設されたものという憶測が許されるならば、その施設は先に推測した台地範囲からみて相当な規模を想定しうる。今後の周辺調査が期待される。

柵・倉庫群の性格

柵状遺構と倉がば同時に造営されたことはくり返し述べた。では外部との区画と思われるSA091に囲まれたこの倉庫群はどのような性格の施設なのであろうか。該期の一般集落にみる倉と位相の異なることは論を俟たない。すくなくとも6世紀後半~7世紀前半に類例がないこともたしかである。

年代的差異は置くとして、大形倉庫群という点においては、5世紀前半と推測される和歌山県鳴滝遺跡がもっとも近い例であろう。令制期に例をとれば、いくつか明らかにされている郡衙正倉に匹敵する内容といえる。しかし、郡衙正倉にしても福島県磐和久遺跡の溝、福岡県小郡遺跡の柵列を除いて外部区画を伴う例はみあたらない。

近年調査例が増加している5~6世紀代の有力首長層居宅では、その内部に大形倉庫群を伴う例は知られていない。わずかに6世紀を前後する頃に比定される兵庫県松野遺跡のばあい、1辺40mの柵に囲まれた区画外に、さらに別の区画を設けて小規模な倉らしき総柱建物を配置しているが、規模、企画性のうえで比較するにいたらない。

やはり、いまのところ比すべき例がないといわざるをえない。ところでこの倉庫群の性格を考えるうえで考慮すべきものに日本書紀宣化二年五月辛丑条の「修造官家那津之口」いわゆる「那津官家修造」記事がある。屯倉設置、那津官家記事については、史料批判を含めて数多くの論収が発表されているがいまなお那津官家の性格に関する定説をみない。また「那津官家」の位置については那珂郡三宅郷（現福岡市南区三宅）本調査地点から南に約3kmの地が比定され、大方がこの通説を引いてきた。日野尚志氏は本調査地点の西に「三宅田」、北に「官田」「犬飼」の地名が残ることから、那津官家に付属する水田をこの一帯に想定した。

いま日本書紀掲載記事、残された地名をもって、検出された倉庫群を「那津官家」に伴う倉庫群と連断するには余りにも論証手続きが不足である。しかしながら、この倉庫群が該期の類例に比すべきものもなく、令制期正倉に通じる構成をとることに留意せざるをえない。

注 1) 柵・建物の構造に関しては、九州芸工大 澤村仁先生からご教示を得た。

2) 日野尚志「筑前国那珂、黒田、柏屋、御笠四郷における豪里について」（佐賀大学教育学部研究論文集 24(1) 1976)



付図 調査区全体図 (1:200)

■ 掘立 ■ 砂場穴 ■ 空棺

福岡市埋蔵文化財調査報告書第116集

比恵遺跡

第8次調査概要

発行 福岡市教育委員会
(福岡市中央区天神1-7-23)

1985年3月1日発行

印刷 同盟印刷株式会社